

ロッシーニ：歌劇《セビリアの理髪師》序曲

ジョアキーノ・ロッシーニ（1792-1868）は、19世紀のイタリアとフランスを舞台に活躍したオペラの巨匠である。美食家としても有名で、みずからが考案したトリュフとフォアグラ付きステーキは、今なお「ロッシーニ風」の名で知られている。そんな彼の代表作である「セビリアの理髪師」（1816年ローマ初演）は、才気あふれる理髪師のフィガロが恋のキューピッド役となってアルマヴィーヴァ伯爵とロジーナが結ばれるまでの一騒動を描いたオペラ・ブッフア（喜劇的オペラ）である。ボーマルシェによるこのストーリーは、モーツァルトがオペラ化した「フィガロの結婚」の前段にあたる。本日の「序曲」は、波乱含みのストーリーを予感させるように、緊張感をはらみながら快速に進み、楽器の数をしだいに増やしながらか音量を上げていく「ロッシーニ・クレッシェンド」も効果を上げている。

リスト：ハンガリー狂詩曲第2番

フランツ・リスト（1811-1886）はハンガリーに生まれ、パリでピアニストとして華々しく活躍した後、ドイツのワイマール宮廷の指揮者になるなど国際人のイメージがあるが、祖国への思いは強く、1838年の大洪水以降はとくにハンガリーを題材にした作品が増えていった。その代表的な例が、一連の《ハンガリー狂詩曲》である。リストにとってハンガリー音楽の代表はロマ楽団（ジプシー楽団）の音楽であった。本日演奏される有名な第2番でも、ロマ楽団の音楽によくある特徴をまねて、「ラッシャン」と呼ばれるゆっくりとした音楽と、急速な「フリシュカ」が対比されている。曲の後半はますます速度を増しながら複数の主題が交代し、興奮を巻き起こす。

マスカーニ：歌劇《カヴァレリア・ルスティカーナ》より 間奏曲

19世紀末のイタリアでは、人間のむき出しの感情や理不尽な行いが悲劇的な結末をもたらす様子をリアルに描く「ヴェリズモ（現実主義）」のオペラが流行した。その代表的な例が、ピエートロ・マスカーニ（1863-1945）の《カヴァレリア・ルスティカーナ》である。シチリア島を舞台に、村の青年トゥリッドゥを愛するサントウツァ、トゥリッドゥに妻を奪われ決闘にいたるアルフィオらの激情が、最終的に殺人という悲劇を招く。〈間奏曲〉は、サントウツァがアルフィオの妻の不貞を告げ、アルフィオが復讐を誓って去ったあとに演奏される。穏やかだが激しい情熱を秘めた音楽である。

スメタナ：連作交響詩《わが祖国》－第2曲 モルダウ

名旋律が歌になる、その代表的な例が〈モルダウ〉であろう。日本でも合唱

曲として親しまれており、きっと誰もがどこかで聴いたことがあるポピュラーな旋律である。〈モルダウ〉は、まだチェコが国として独立を果たせなかった時代に、ベドルジフ・スメタナ（1824-1884）が祖国への思いをこめて作曲した連作交響詩《わが祖国》の第2曲として作曲された。モルダウ（ヴルタヴァ）河

の流れに沿って、チェコの風景や伝説、民族の熱い思いがオーケストラによって表現されている。曲は2本のフルートで始まる「最初の源流」から、ホルンが響く「森の狩」、ポルカ（チェコの舞曲）風の「森の婚礼」、「月の光と水の精の踊り」、「聖ヨハネの急流」、「ヴルタヴァ、力強い流れ」へと進む。ここでは哀愁にみちた最初の主題が、長調の雄大な主題に変身をとげ、最後は民族を讃えるように、《わが祖国》の第1曲〈ヴィシエフラド〉（チェコの古城が築かれた岩山）の主題が鳴り響く。

ワーグナー：歌劇《ローエングリン》より 第3幕への前奏曲

1850年に初演されたリヒャルト・ワーグナー（1813-1883）の歌劇《ローエングリン》の舞台は、中世のブラバント公国。大公が亡くなり、長女のエルザと弟が残されるが、後を継ぐはずの弟が行方不明となる。領主の座を狙う伯爵フリードリヒとその妻によって、エルザは弟殺しの汚名を着せられてしまう。追いつめられたエルザが夢で見た騎士に救いを求めると、天から騎士が白鳥とともに現れる。騎士は自分の名前や素性を聞かないことを条件に伯爵と決闘して勝利し、二人はめでたく結ばれる。しかしエルザは白鳥の騎士に素性を問うという禁断の質問をしてしまったため、騎士は自分が聖杯の騎士のローエングリンであることを明かして再び天空へと去っていく。第3幕への前奏曲は、二人の結婚式に先立つ壮麗な音楽で、金管のファンファーレやシンバルが祝祭的な雰囲気をかもしだす。

サン=サーンス：歌劇《サムソンとデリラ》より バッカナール

カミーユ・サン=サーンス（1835-1921）は《交響曲第3番（オルガン付）》や《動物の謝肉祭》などでよく知られるフランスの作曲家。実はオペラも多数残しており、《サムソンとデリラ》はその代表作である。旧約聖書を題材に、ペリシテ人の支配下にあるユダヤの英雄サムソンが、妖艶なペリシテ女、デリラの誘惑に負けて怪力の源が髪の毛にあることを教えてしまい、捕われて髪を切られ、目をくり抜かれてしまうが、神に祈りながら渾身の力を込めて柱を揺ると、ペリシテ人の神殿は崩壊する。〈バッカナール〉は第3幕でサムソンを捕らえたペリシテ人たちが祝宴を開いて乱舞する、エキゾチックな音楽である。

ボロディン：交響詩《中央アジアの草原にて》

19世紀後半、ロシアでは民族精神が高まり、「5人組」もしくは「力強い仲間」と呼ばれる作曲家たちが個性豊かな作品を生み出した。《展覧会の絵》でおなじみのムソルグスキーらとともにその一員だったアレクサンドル・ボロディン（1833-1887）は、医学者、化学者としての激務のあいだを縫って、オーケストラ曲やオペラなどに傑作を残した。代表作のひとつである交響詩《中央アジアの草原にて》は、皇帝アレクサンドル2世の即位25周年にあたる1880年、祝賀行事としてこれまでの偉業を活人画（舞台背景の前で俳優たちが画中の人物のように演じる）で上演することになった際に、その付随音楽として作曲されたものである。広大な草原をロシアの隊商が行くなか、アジアの隊商が近づき、やがて二つが合わさって遠のいていく情景が、ロシア民謡や東洋風の旋律によって描かれる。

ヴォルフ=フェラーリ：歌劇《マドンナの宝石》より 間奏曲

エルマンノ・ヴォルフ=フェラーリ（1876-1948）はイタリアのオペラ作曲家。その代表作である《マドンナの宝石》は、前述の《カヴァレリア・ルステイカーナ》と同じくヴェリスモの作風による悲劇的なオペラである。奔放なマリエラに思いを寄せる鍛冶屋のジェナロが、彼女を得るために聖母（マドンナ）の宝石を盗むが、失恋と罪の深さに自ら命を絶つ。有名な〈間奏曲〉は、切ない恋心を表すかのような美しくも悲しい旋律が綿々と歌われていく。

チャイコフスキー：イタリア奇想曲 Op.45

異国を題材にした作品は数多いが、それらは大きく2つに分けられる。ひとつは実際に異国を訪れた体験によるもの、もうひとつは想像のなかで作り上げられたものである。ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840-1893）の《イタリア奇想曲》は前者のタイプの作品で、彼が弟のモDESTととともにイタリアのローマを訪れたときに書き始められている。北国ロシアのチャイコフスキーにとって、南国イタリアの明るい太陽や陽気な民謡は、ともすると陰鬱になりがちな彼の心を活気づけたことだろう。曲中にもイタリアの民謡や舞曲が取り入れられている。また、冒頭のトランペットのファンファーレは、ローマ滞在中にイタリア騎兵隊の兵舎から聞こえてきたものといわれる。

遠山菜穂美

※※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。